



原田芳起著

探究日本文学  
中古  
中世編

風間書房

探究日本文学中古世編

定価 二二、〇〇〇円

著者 原田芳起はらだ よしお

発行者 風間歳次郎ふうま さいじろう

印刷者 佐々木隆彦ささき りゅうげん

発行所

株式会社  
風間書房

101 東京都千代田区神田神保町一の三四

電話〇三(二九一)五七二九番

振替東京一―一八五三番

昭和54年12月5日 印刷  
昭和54年12月15日 発行

(有朋製本)

(分)3091 (製)790520 (出)0925

## 序

昭和四年に鹿児島方言の音韻に関する論文を執筆して、翌五年九月「国語と国文学」誌に掲載していただいて以来、方言研究の調査や論考も十数編、いろいろの雑誌に発表して来たが、昭和六年頃から日本文学関係の評論や研究を執筆する機会が多くなった。昭和二十七年頃からは、大学で国語学を担当するようになった関係から、文法研究・語彙研究、解釈研究の課題を検討する機会が多くなったが、従前から持ち越して来た日本文学研究も捨てたわけではなかった。従って私の学問研究のコースは、いつもジグザグで、錯雑していた。

徹頭徹尾独学の道を歩いた私は、いつも迂遠な廻り道をして来た。俗にいう至って要領のわるい男である。能率よく学問の全貌を把握して、その上に立って、専攻領域を何か一つに絞って深く究めるといふすべをわきまえていない。二兎を追う愚を避け給えと、いろいろな方から忠告をされたが、一向にその愚かさを改め得ない。自分で確かめてみると、何一つも自分の知識・知見にする事が出来ないままに、さまざまな地点で道草を摘んでは長いこと時間をつぶした。ふりかえってみると、私の学問には専攻領域といえるものがなかったかも知れなかった。

戦前戦後を通じてはぼ五十年にもなんなんとする間に、執筆し、発表した瓦礫のような論文は、随分の数になる。手を加えて単行の著述に纏めて出版したものもあるが、それは何らかの主題のもとに収まるものに限られている。それ以外にも、今に至っても愛着を感じて捨て切れない論文が数多く残っている。それらの中から、日本文学に関する

考証や提説を含む論考を、若干の補訂を加えて定稿とした上で纏めて出版して置いたら、日本文学研究にわずかにでも裨補する所もあらうかと、いささかながら自負し得る編章を選んでみた次第である。

この冊には、中古・中世の文学に関するもの十六編を収める。追って近世・近代編と拾遺編とを予定しているが、それはいつの事になるか、自分でもわからない。

発表時の原論考は、ほとんどが締切りに追われ、スペースを制限された中の執筆であったから、そのままの載録では甘心しがたいので、説明の不足を補い、条理の尽くされていない部分も改め、学界の進歩に照らして、もはや不要と思われる叙述は思い切って削除する。行文の欠陥を感じる部分は措辞も大幅に変える場合もある。ただし、論の視点は、原則的には発表当時から大きく背反しないように心がける。たとえば、巻頭の論文「源氏物語の構想に関する覚え書」は、昭和八年に発表したものであり、帚木系の巻々をめぐる論争の起こる以前の私論であるから、それらの諸説を飛び超えて論旨をいじる事はしない。ただし、私自身が現在否定しているような意見は、本書の定稿の中には含まれていないと見ていただきたい。もし現在の視点で立言したい事があれば、追記・後記の形を取る。他もこれに準じて見ていただきたい。いずれの論考も、従って、現在の著者の見解であると見なしていただいて差支えない。

本書に収める各論文と関連する原論文とその発表形態については、付録の著書論文目録の中で一覧出来るようにして置く。

本書の刊行については、風間書房主風間歳次郎氏の好意に負う所が大きい。謝意を表したい。

昭和五十四年九月

著 者

# 目次

## 序

## 第一部 中古編

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 一 蜻蛉日記私抄——上巻・初瀬詣での章の解釈など—— | 一  |
| 一 文脈解読を困難にするもの             | 一  |
| 二 出発から初瀬参籠まで               | 五  |
| 三 字治のわたり                   | 八  |
| 四 文体・描写                    | 一五 |
| 五 印象的描写——心象表現              | 一九 |
| 二 源氏物語の構想に関する覚え書           | 二三 |
| 一 帯木・空蟬・夕顔の三巻の挿話性と原構想への一示唆 | 二三 |
| 二 末摘花の副次性と楔子的位置            | 二六 |
| 三 若紫・紅葉の賀・花の宴——主プロットの展開    | 二九 |
| 四 須磨明石の巻々                  | 三四 |
| 五 大団円の構想 原構想の解決            | 三九 |

|   |                             |    |
|---|-----------------------------|----|
| 六 | 明石以前と濤標以後と                  | 三〇 |
| 七 | 後編の構想                       | 三〇 |
| 八 | 続編の論                        | 三〇 |
| 三 | 源氏物語年立論存疑——葵の巻前後の部分構図について—— | 六  |
| 一 | 問題点                         | 六  |
| 二 | 兼良の考証とその反響                  | 七  |
| 三 | 卜定から野宮入りまでの事                | 七  |
| 四 | 兼良の斎院御禊説                    | 七  |
| 五 | 付随する問題                      | 七  |
| 六 | 付記                          | 八  |
| 四 | 物語年立研究史の一駒——若紫の巻の時間をめぐって——  | 六  |
| 一 | 序引                          | 六  |
| 二 | 新旧年立の難点                     | 六  |
| 三 | 花散里の巻の年立存疑                  | 七  |
| 四 | 若紫をめぐる年立図の修正                | 七  |
| 五 | 付説                          | 七  |
| 五 | 浮舟悲劇の意味——究極的主題は何であったか——     | 二五 |
| 一 | 序章                          | 二五 |
| 二 | 発端                          | 二八 |

|   |                    |    |
|---|--------------------|----|
| 三 | 数にもあらぬ身の悲しさ        | 二一 |
| 四 | 人形にされた女            | 二四 |
| 五 | 人形の悲しさ             | 二三 |
| 六 | 二つの愛               | 二七 |
| 七 | 結び、蘇生・出家の意味        | 三三 |
| 六 | 大東急本奥義抄と忠岑十体       | 三四 |
| 一 | 大東急本奥義抄と忠岑十体       | 三四 |
| 二 | 大東急本奥義抄の書誌的考察      | 三五 |
| 三 | 顯昭所持の奥義抄           | 四〇 |
| 四 | 忠岑十体の本文校勘から        | 四三 |
| 五 | 大東急本の資料的価値         | 四四 |
| 六 | 両本本文の比較            | 四九 |
| 七 | 大東急記<br>念文庫本 奥義抄管見 | 五八 |
| 一 | はしがき               | 五八 |
| 二 | 書写について             | 六〇 |
| 三 | 改訂本的人格——その質的考察 (一) | 六三 |
| 四 | 改訂本的人格——その質的考察 (二) | 六八 |
| 五 | 改訂内容と他説との影響関係      | 七五 |
| 六 | 拾遺雑考               | 七九 |

## 第二部 中世編

|    |                   |    |
|----|-------------------|----|
| 八  | 三十六番相撲立詩歌と後京極摂政   | 一七 |
| 一  | 三十六番相撲立詩歌は良経自撰    | 一七 |
| 二  | 歌の作者の検討           | 一九 |
| 三  | 成立時期の考証           | 二〇 |
| 四  | 後京極殿御自歌合との関係      | 二〇 |
| 九  | 光厳院御集と花園院御集       | 二三 |
| 一  | 光厳院御集に関する考証の錯誤    | 二三 |
| 二  | 弁証その一             | 二六 |
| 三  | 弁証その二             | 二六 |
| 四  | 弁証その三             | 二八 |
| 五  | 列聖全集所収花園院御集(本)の実態 | 三〇 |
| 六  | 書陵部蔵花園院御集の成立過程    | 三三 |
| 七  | 弁証の帰結からの提説        | 三五 |
| 一〇 | 光厳院御集ならびに拾遺       | 三九 |
|    | 序ならびに凡例           | 三九 |
|    | 校光厳院御集            | 四一 |
|    | 本光厳院御集            | 四一 |

|             |    |
|-------------|----|
| 光嚴院御集拾遺（新編） | 二五 |
|-------------|----|

|                     |    |
|---------------------|----|
| （一） 風雅和歌集所出太上天皇御製歌  | 二五 |
| （二） 新千載和歌集所出法皇御製歌   | 二六 |
| （三） 新拾遺和歌集所出法皇御製歌   | 二六 |
| （四） 新後拾遺和歌集所出光嚴院御製歌 | 二六 |
| （五） 新統古今和歌集所出光嚴院御製歌 | 二六 |
| （六） 臨永和歌集所出東宮御歌     | 二六 |
| （七） 藤葉和歌集所出院御製歌     | 二六 |
| （八） 補遺追加 法華經要文和歌より  | 二七 |

|             |    |
|-------------|----|
| 二 白髮集と宗祇初学抄 | 二七 |
|-------------|----|

|                  |    |
|------------------|----|
| 一 白髮集と宗祇初学抄とは別の書 | 二七 |
|------------------|----|

|       |    |
|-------|----|
| 二 弁 証 | 二七 |
|-------|----|

|               |    |
|---------------|----|
| 三 本来の白髮集は切字伝書 | 二七 |
|---------------|----|

|               |    |
|---------------|----|
| 四 宗祇初学抄の写実主義論 | 二八 |
|---------------|----|

|                 |    |
|-----------------|----|
| 二 連歌発句管見——切字と句格 | 二九 |
|-----------------|----|

|         |    |
|---------|----|
| 一 発句と季題 | 二九 |
|---------|----|

|             |    |
|-------------|----|
| 二 発句句格論への序説 | 三〇 |
|-------------|----|

|                 |    |
|-----------------|----|
| 三 切字としての「や」「かな」 | 三〇 |
|-----------------|----|

|               |    |
|---------------|----|
| 四 初期俳諧の発句への推移 | 三一 |
|---------------|----|

|    |                             |     |
|----|-----------------------------|-----|
| 一三 | 出陣千句考説……………                 | 三〇  |
| 一  | 解題諸説の錯誤に対する弁証……………          | 三〇  |
| 二  | 三島神前独吟千句の成立……………            | 三三  |
| 三  | 乱世の文学としての連歌の姿勢……………         | 三六  |
| 四  | 三島神前独吟千句の構成……………            | 三二  |
| 一四 | 柴屋軒宗長の文学——現実諦観とわび——……………    | 三四  |
| 一  | はしがき……………                   | 三四  |
| 二  | 宗長の三島独吟千句の事……………            | 三五  |
| 三  | 宗長連歌の考察……………                | 三四〇 |
| 四  | 同 じ く……………                  | 三四七 |
| 五  | 酬恩庵に於ける俳諧連歌の考察……………         | 三五六 |
| 六  | 宗長の俳諧体短歌長歌の風体……………          | 三七〇 |
| 七  | 宗長の随想的散文の面白味……………           | 三六五 |
| 八  | 転換期の文学者としての宗長……………          | 三九三 |
| 一五 | 統・柴屋軒宗長の文学——俳諧体散文の誕生——…………… | 三九七 |
| 一  | 統稿の弁……………                   | 三九七 |
| 二  | 東路のつとの文体……………               | 三九八 |
| 三  | 宇津山記の文体……………                | 四〇〇 |

|    |                     |     |
|----|---------------------|-----|
| 四  | 宗祇・宗長・芭蕉の比較         | 四〇五 |
| 五  | 宗長の散文の文章史的評価        | 四二  |
| 一六 | 軍記物語の思想性            | 四二七 |
| 一  | 序文・序章の示す思想的性格       | 四二七 |
| 二  | 保元物語を支配する思想の性格      | 四二五 |
| 三  | 平治物語の思想性をめぐって       | 四二二 |
| 四  | 平家物語の主題的統一          | 四二五 |
| 五  | 思想的主題から見た太平記の位置     | 四二一 |
| 六  | 義経記・曾我物語の位置         | 四二八 |
| 員外 | 光厳院御製歌拾遺追補          | 四五二 |
| 付録 | 本書と関連ある著者執筆著書・論文の目録 | 四五五 |

## 第一部 中古編

### 一 蜻蛉日記私抄

——上巻・初瀬詣での章の解釈など——

#### 一 文脈解読を困難にするもの

安和元年九月、作者が初度の初瀬詣でを強行した折の記事は、比較的長文をなしていて、印象的な描写を含んでいる勝れた文章であると思うが、文脈が隠微であるために、場面を正確に把握して理解する事がすこぶる困難である。これまでの注釈類を読んでみても、納得のゆかないくだりがたくさんある。

昭和七年頃だったか、この日記のこの初瀬詣での部分を、ある公開講座の席で解読してみた事があったが、その時に唯一の手がかりとして『解環』を用いたのであるが、読んでいるうちに、わからない事が多くなって苦しくなって汗を流した記憶がある。今はその後の先学諸賢の業績も多く、その学恩にあずかる事が出来るようになったので、ずっと読みやすくなった。それでも、平安期の古典の中では、現在（この稿執筆の昭和三十年）なお、もっとも未開拓な状態に置かれている事は否定出来ない。

『蜻蛉日記』が、近時、評論的な面で花々しく取り上げられている事は、当然のなりゆきであり、私ももととそ

の方からの興味で、この作品の解説に取り組んで来たものであったから、この研究史的展開を歓迎するのであるが、その人物論や作品の性格論などの根拠は、外ならぬ作品の文章の正しい解釈に置かれるべきであり、解釈の誤差が評論の結果を左右する場合もある事が予想されるのであるから、解釈作業にもっと衆知を集めなければならない事を痛感するのである。

問題の本文を掲げる前に、この日記の解釈の困難さが、主としてどこにあったかを考えておきたい。その第一は、もちろん本文批評の困難さである。この面でまず考えられる事は、比較資料が少ない点である。この作品には系統を全く異にする写本がほとんどないと見受けられる。ある章句があったりなかったり、基本的に対立すると見られる異文があったり、文脈に繁簡出入のちがいがあってというような、対立する異本と見なすべき写本は、現在のところ見当たらないようである。比較的に降った時代の写本が、現存する諸写本の共通の祖本であって、結局、どれがどれの写しちがいであるかをきとめて共通の祖本の形を再現し、そこから創作時期の原本文を推定するという一本道である。その点は、『土左日記』『更級日記』などの場合と極めて似ている。（現存諸写本の比較によって祖形を再現する事の出来る領域が至って小さいのであり、原本文を定める作業が多く推定にやらざるを得ず、推定には主観が忍び込む事を防ぎ難いという点が、この日記の本文批評の困難さの最大の原因である。）大きな誤脱のようなものは、比較による復原は不可能に近いであろう。

第二には、語彙語法の解釈という方面であるが、これは今日までの研究でかなりよく解明されているので、思案にくれるようなものは、比較的少ない。

第三には、文脈の解説に関する困難さであるが、今日ではこれが一番問題が多いと私は考えている。この作品が日記であるという性格から来るものでもあろう。作者は極めて純粹に一元描写の手法を守っている。この日記に描かれ

る世界は、作者自身の立場・視点からのみ眺められる。作者の視野からはずれた遠い世界を語る事をしない。作者と直接する世界だけを語ってゆく。それを時間の流れが貫ぬいているのである。

たとえば、夫である藤原兼家という人物を語る場合、彼の官職や地位によって呼ぶとか、世間的称呼を以て呼ぶとかいう事をしないで、単に「人」という漠然たる抽象的称呼に自己との関係を示す修飾語を冠して表現するのが常である。

人はまだ見馴るといふべきほどにもあらず。(上・天曆八)

見る人も、いとあはれに忘るまじきさまにのみ語らふめれど、(上・天曆八)  
見るべき人見よとなめり。(上・天曆八)

「人來ば取らせよ」とて書き置きたる、(上・天曆八)

物を語らひおきなどすべき人は京にありければ、(上・天曆元)

東宮の亮といひつる人は、藏人の頭などいひてののしれば、(上・康保四)

かかる世に中将にや三位にやなど悦びをしきりたる人は、(上・康保四)

第三者から極めてわかりにくい表現である。作者との関係を計って考えてみて初めてそれが彼女の夫兼家であると納得される。結局彼女が自分の夫君をさして言う語は「人」しかなかったのである。後世の「こちの人」「こちの」などを思わせるが、それはすでに「ハズバンド」「夫」の意味を定着させた語となっているが、『蜻蛉日記』では「夫」の意味の定着した呼びかたが見当たらず、「殿」とか「中将殿」とかの世間的称呼も用いていない。そして、父をさして「たのもしき人」と呼び、姉であろうと思われる人物を「あまたある中にたのもしきものに思ふ人」と呼ぶ。よ

くよく作者周辺の事情に通じている人でなければ、この日記の文脈把握には、まことに厄介な問題があるといわなくてはなるまい。それに加えて、この日記に限らず、作者の身近な人物に関する表現では、主語や目的語などを省略する事が多いものである。

さてそれで文脈構成の原理的な、支柱というべきものもないか、という点、ないとは決していえない。これは特に私見を述べて批判を乞いたいと思っている事であるが、この日記のすべての記事が、作者の視聴に直接触れた形においてのみ表現されているという事である。作者の眼前でない世界でなされた動作や状態を、「彼が手紙を書いた」「誰それがこれこれの事をした」などとは表現する事をしなかったのが原則である。これは徹底した一元描写である。

「身の上をのみする日記」(中・安和)という立て前を出来るだけ崩すまいとしたのである。この日記を支配している文体上のこの特色は、文脈解説の一つの重要な鍵であると思う。

次に、作者は、兼家を初めとする身内の人々に就いて語る時、それが尊属であっても、日記の地の文では殆んど敬語を用いなかった。兼家と対話する時には、お互いに敬語を用いている事はもちろんであるが。この点はすこぶる興味のある事で、他に対して自己の家の内の人の上を語るには敬語を用いないという習慣が平安朝の当時からあった事を知らせる資料でもある。夫兼家の所作を言うのに謙退の表現を用いたと見られる箇所も、一例だがあるようである。(これは本文批評の作業と関連するので、断言を避けて他日を期したい。)右に述べた待遇表現上の特色も、文脈の秘密を解明する鍵となる事がある。

## 一一 出発から初瀬参籠まで

この稿では、全文に詳細に触れる事は考えていないので、前半にあたるこの部分は、一二の所見を記すにとどめる。初度の初瀬詣での記事は、上巻の終りに近い所にある。安和元年九月、作者は「年ごろの願」を果たすべく初瀬詣でを思い立った。十月には大嘗会の御禊があり、兼家の家から女御代（時姫の腹の子超子）が立つので、兼家は多忙な時期である。「これ過ぐしてもろともにやは」と翻意を勧告したのであるが、作者は「わがかたの事にしあらねば」と、いささかすねたような気持で、強いて出発する。この作者の気持は、おそらく自分が無視されているようで淋しかったのであろう。兼家といえども、こうした女心の機微が全くわからなかったのではなかったらしい。旅の途中まで使を走らせて、「帰るべからむ日聞きて、御迎へにだに」と書いたふみを伝えさせる。これにさえ作者は、あながちにえこじな返事をする。「かかるついでにこれよりも深くと思へば、帰らむ日をえこそきこえ侍らね」と言う。多少おどかしの気味もあるが、悪くすると激情の赴くにまかせて出家もしかねないのが女心である。だが、ほんねは兼家の心を引こうとしたのであろう。

このあとに、

そこにてなほ三日さぶらひたまふこと、いとびんなしなど定むるを使聞きて帰りぬ。

とある。文意に大きな疑問を感じさせる所はないのであるが、諸家の訳注を見較べていて、多少の問題はないわけではない。「そこにて」は地の文として読んだ方が文の流れを安定させるのではなからうか。「そこ」は、使が来て兼家の書簡を奉じ、作者が返事を書いて渡すその場面を意味し、その周辺で作者の供人たちが評議しているのである。そ